

紙本着色新田大明神縁起絵

加卜筆

都指定文化財（絵画）

昭和38年（1963）3月19日指定

所在地：新田神社 矢口1-21-23

交通アクセス：東急多摩川線武蔵新田駅から徒歩5分

公開の有無：通常非公開 ※毎年10月10日の例大祭で一部公開



怨霊となった新田義興（「新田大明神縁起絵」下巻より抜粋） 画像提供：株式会社半田九清堂

新田義興（新田義貞の次男、1331-58）は、南北朝時代の軍記物語『太平記』によれば、鎌倉に攻め入る途中で策略に遭い、「矢口の渡し」で13人の家臣とともに悲惨な死を遂げたとされています。死後は怨霊となり、策略に加担した人物には祟りをもたらし、さらに夜な夜な「光りもの」となって矢口付近に現れ、往来する人々を悩ませました。そこで義興の霊を鎮めるために、村の人々によって墳墓と社祠が築かれ「新田大明神」として祀られたことが、新田神社の起こりであると伝わります。

江戸時代、徳川将軍家が新田氏の末裔とされたことから、新田神社は武運長久の神として多くの武家から信仰を集めました。そうした背景の中、延宝4年（1676）に松平（池田）政種※（1637-83）から寄進されたのが「新田大明神縁起絵」です。上下巻で構成されるやまと絵（中国の水墨画に由来する唐絵に対し、色彩豊かに描く和風の絵画）の絵巻物で、義興の生涯から新田神社の創建までが緻密に描かれています。詞書の筆者は上野佐兵衛、絵師は上野加卜と記されますが、両者について詳しいことはわかりません。昭和38年（1963）に東京都の文化財に指定され、平成28年度には保存修理が実施されました。

その後、蘭学者や発明家として知られ浄瑠璃作家でもあった平賀源内（1728-80）が、新田義興の縁起を題材とした「神霊矢口渡」を書き上げると、のちに歌舞伎でも上演されるなど好評を博しました（別稿「頓兵衛地蔵」参照）。また、義興の墳墓に生える篠竹を、源内が魔除け（矢守）とするよう勧めたことが、今日の破魔矢の由来であるとも言われています。江戸時代後期に発行された『十方庵遊歴雑記』や『江戸塵拾』には、神社門前で紙製の矢が売られていたことが記されています。

※江戸幕府旗本。戦国大名で初代姫路藩主・池田輝政の孫。父・輝興が徳川家康の外孫にあたるため松平姓を与えられた。